

ナシのニセナシサビダニの防除

～見えなくてもそこにいる。ニセナシサビダニ防除はお早めに～

水谷浩孝（西三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成29年11月21日掲載】

【要約】

近年、ニセナシサビダニの食害によりナシ発育枝の葉が萎縮する被害が多発している。そこで、推奨する防除対策である3月（発芽前）のマシン油乳剤（97%）と5月上旬の殺虫剤を散布した園においてニセナシサビダニの寄生数を確認したところ、6月中旬まで要防除水準である50～100頭/葉より低い水準に抑えていることを確認できた。また、ニセナシサビダニの発生を確認するには、30倍の実体顕微鏡を使い、未硬化上位葉の葉柄の葉表側の溝の中などを重点的に観察すると良いことが分かった。

1 はじめに

近年、ナシ発育枝の葉が萎縮する被害が多発している。これは、ニセナシサビダニによる食害が原因と考えられる。ニセナシサビダニは、体長約0.2mmのクリーム色をしたウジ虫型のダニ（図1）で、葉に被害が見られるまで、発生に気付かないことが多い。

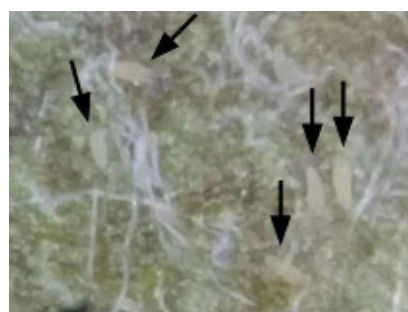


図1 ニセナシサビダニ

ニセナシサビダニの防除に早くから取り組んできた鳥取県では、3月中旬のマシン油乳剤（97%）散布と、発生盛期の6月中旬のトルフェンピラド水和剤の散布を推奨している¹⁾。当地域では、鳥取県との気温の違いを考慮し、3月（発芽前）のマシン油乳剤（97%）の散布と5月上旬にニセナシサビダニに登録のある殺虫剤での防除を推奨している。しかし、虫体を直接肉眼で観察することが困難なうえ、発生から被害の発現までに時間差があり防除効果を実感できないことから、各生産者の防除が徹底できておらず、被害が増加していると思われた。

そこで、農業改良普及課が、現地のナシ園のうち、推奨する防除対策を実施している園（以下「推奨対策の園」という。）と、実施していない園（以下、「不実施の園」という。）で、ニセナシサビダニの発生状況を調査した。また、調査の過程でニセナシサビダニの発生を確認するための「コツ」が得られたので、あわせて紹介する。

2 調査方法

推奨対策の園2か所と、マシン油、殺虫剤いずれかしか散布していない、不実施の園3か所を選定した。4月下旬から7月中旬まで、旬ごとに新梢5本について最上位展開葉から5葉を採取し、30倍の実体顕微鏡を用いて1葉あたりの寄生虫数を調査した。参考文献（1）に従い、50頭/葉以上を要防除水準とした。

また、各調査園の農薬散布状況について聞き取りにより調査した。

3 調査結果

調査各園とも、ニセナシサビダニの寄生虫数は、6月中旬まで平均0～6頭/葉程度で

低く推移した。その後、C園では6月下旬、D園では7月中旬に増加し、要防除水準となる50頭/葉以上となったが、推奨対策のA園、B園では調査期間中、寄生虫数は少なく維持された（表1）。

表1 調査園における薬剤散布状況とニセナシサビダニの発生状況

園名	薬剤散布		6月中旬までの 平均寄生虫数 (頭/葉)	7月中旬まで	
	マシン油 (3月)	殺虫剤 (5月上旬)		最多寄生虫数 (頭/葉)	最多となった 時期
推奨対策の園	A	有	0.0	33	7月上旬
	B	有	6.0	12	5月上旬
不実施の園	C	有	0.5	113	6月下旬
	D	無	0.5	520	7月中旬
	E	無	5.4	11	5月上旬

4 考察

調査各園とも、ニセナシサビダニの寄生虫数を、6月中旬まで要防除水準である50～100頭/葉より低い水準に抑えることができた。しかし、不実施の園のC園とD園では、要防除水準を越えた。一方で、3月にマシン油乳剤（97%）、5月上旬にニセナシサビダニに効果のある殺虫剤を散布した園で、ニセナシサビダニの寄生虫数を低く推移させることができた。したがって、葉の被害が確認される前に実施するこれらの対策が有効であると考えられた。

5 今後の取組

発生後放置すると被害拡大の温床となる可能性があるため、推奨する防除対策の実施を指導するとともに、防除効果について今後も調査を継続していく。

6 ニセナシサビダニの発生確認のコツ

(1) 生息部位

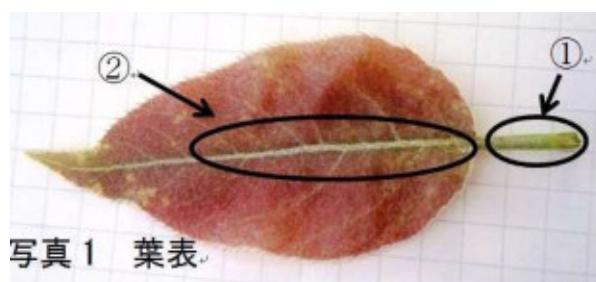
ア 未硬化上位葉の毛じの間に多く生息しているため、展葉1～2枚目の葉が調査に適している。なお、展葉前の葉は、毛じが密にあり、虫体が見にくい。

イ 葉の部位では、①葉柄の葉表側の溝の中、②葉表の主脈の毛じの間（写真1）、③葉裏の主脈の基部付近に多く生息している。

③は葉を縦半分に折ると観察しやすい（写真2）。

ウ 寄生虫数が少ないうちは上記①～③でほとんどが発見されるが、数十頭/葉を超えると、その他の場所（毛じが多く、くぼんだ所に多い）でも見られるようになる。

エ 新梢先端の展開第1葉に100頭以下であれば、第4葉～5葉には数頭しか見られないことが多い。



(2) 使用器具

実体顕微鏡の倍率は30倍が見やすい。動くものは10倍程度でも識別できる。しかし、レンズ径の小さい単眼鏡は視野が狭すぎて不向きである。

(3) 注意事項

ア 葉脈に沿って並ぶ分泌物（溢液）と見分けがつきにくい。動く、足がある等で見分けるが、慣れれば表面の凹凸（サビダニの方が平滑）でおおよそ判断できる。

イ 硬化した葉では症状があっても、虫体を発見できないことが多い。

7 参考文献

(1) ニホンナシにおけるニセナシサビダニの季節的消長と要防除水準 伊澤宏毅 日本応用動物昆虫学会誌 第44巻 第2号：130-133 (2000)

(2) マシン油乳剤を活用したナシ園におけるニセナシサビダニの防除対策
www.pref.tottori.lg.jp/secure/1069076/54f02.pdf